

1985年11月号

1985年11月5日発行(毎月1回5日発行)

№.109

あんふあんて

発行人/ 発行所/あんふあんて出版部
定価/200円 振替口座/ あんふあんての会

年齢相応に妻帯者になりたかった男と親の管理を脱する合法手段の女との打算だらけの構図は
子供に色を添えられて
もっともらしい風景に仕上がっていた妻の家事する願音に心安まる夫は
女に主張のあることを不思議がり
並みが幸せなのだと思われ返す
ただならぬ力でも潜んでいるのか、と妻は懐疑的に周囲をうかがい見る
意識と現実が ゆるんだ基盤の上を交錯し
いつしか私の中に
夫と子供がむすび合わなくなり
自分を抱くかのように私は子供を抱きしめる
家族の幻影だけを存分に愛せる夫は
母と子供を尻目に淡々と働いてみせる
他人の女と男が暮らすこと……それは
互いに自分を生き直すことかも知……
もともと偶然の集まりなのだからと
子供の方がケロリと云う
五人分のエゴを持て余し
馴れあいの深みへ更に
家族歴十四年

詩 岡部



夫の入院に思う

妻・夫V

福岡市

夫が入院して二ヶ月になる。結婚して十年で起きた完治しにくい夫の病は、私に夫婦の繋がりを見せつけた。

この十年、夫一人がずっと稼ぎの担い手であり、私は一円たりと稼いだことはない。二人共、男女役割分担を肯定するものでは決してなく、かえって人生論的議論では男女共に真の生活者としてあるべきだと一致した考えを持ってきている。子供の育て方もその考えを基礎としてきている。その私達が旧態依然とした分業を現実否定することなく、そこから脱却することなく十年を過ごしてきたのはひとえに分業による生活が互いに心地良かったからに他ならない。

つましくすれば夫一人の収入で生活出来たし、ゴルフ、マージャン、バーめぐり等出費のいる遊びには自分から近づこうとしない地味な彼の人となり、妻の稼ぎを促しも期待する気持も生まなかったのだと思う。

一方、生き方の指向が労働に向けられていない妻は、稼がないひけ目からその意味で夫を大切にすると、家事に手を抜く事を怖れ、いろんな場面で専業主婦として自己規制をする。それは夫にとっても居心地の悪い夫婦のあり様、家庭状況となっていたわけだ。

建前として、全的な生活者としての存在を肯定しあいつつ、自分達に論を向けると切実な経済的事情やまた心の深い部分から来る、働く事への切迫感にはまるで欠けており、分業のもたらすイージーな、優しく穏やかな家

庭、夫婦関係に本音の部分でしっくり落着いていたのだ。

つれあひとして夫が好きだ。ただ、「男」として、性愛の対象としてそう言い切れるのか、と自問すれば、どこかあまい口ごもる部分が残る。夫婦の繋がりに時に偽りめいた匂いを感じることもあった。

夫婦って何だろうーそんな思いにしばしばとらわれるようになったのは、この二ヶ月である。完治するかどうか見込のつかない、つまり稼ぎ手として役割を保証されなくなった彼の存在は、これまでの二人の繋がりを考え直させた。

軽く、フツと心に浮かぶ「後妻の口でも探そうかな」という非生産者のヤクザなセリフは、経済的に依存する、依存できる相手だからこそ彼を好きでいられたのじゃないかという疑問を私の内に投げかけた。

想定してみる。働けなくなった夫と子を抱え、自分が嫌がっていた労働につかざるを得なくなった時に、夫を好きとする私の気持は変わらざるあるだろうか？

夫にしても病に向き合って初めて、妻との関りをこれまでと違った目で見つめ始めたように思う。「あまり自分にもたれかかるな、稼ぎ手としての負担を軽くしてくれ」と願っているのではないだろうか。遊びまわっているのでもないの事報告する極楽トンボ、天真爛漫な苦勞知らずの妻を以前と変わらぬにこやかに包みこむように笑ってはくれないと思う。病を抱えて稼ぐ夫のかたわらで、相も変わらず夫だけの収入に頼り暮らしでいるとする妻を、昔と変わらず愛せるだろうか、

彼一人の収入だけで妻を食わせていける自信があったからこそ、夫は妻を優しくいとおしめたのじゃなかるうか。彼は今何を考えているのだろうか。いろいろな思いがよぎる。私達は夫婦として、男と女の関りのゼロからの出発点として、今を捕えなければならぬのかもしれない。十年目に達して直面したこのハードルを、共に生きる男と女としての真の共同性を求めて一つ一つ乗り越えていけたら、と思う。

結婚後の姓はあなたの？夫の？A結婚V

太宰府市

四年生の娘が、何度か私に言った。「お母さんとお父さんは、結婚した時ジャンケンで名前を決めたんだってね。友達に言ったら普通はお父さんの名前をつけるって言うんだよ。」それに答える私のそばには、なぜかいつも姑が居て（現在、夫の両親と同居中。夫が長男だからというわけではないが）、初めは「そげんこと人に言うもんじゃなか。」次の時には「そうさそれが（男の姓をとるのが）あたりまえさ。」になった。私は「結婚する時の姓はどちらでもいいって、法律で決まっているからね。」と言ったのみだった。

私は十年前に結婚したが、姓は自分の選択し現在に至っている。人は夫が養子かと思わず聞き、否定すると、一様に「なぜ？」と聞く。いきさつを説明するのがめんどろな時、「ジャンケンで」と言うことになっているが、今回は、そのいきさつを少し書きたい。

今の夫と共同生活を始めた時は、婚姻届を

ど考えてもみなかった。しかし、子どもができた時まず浮んできた言葉が「私生児」だった。「私生児」に対する世間の差別を考えた、生まれながらにして子供に重荷を背負わせる勇気がなくて、結局父と母と子が同一戸籍上に載るための第一歩としての婚姻届を出すことにしてしまった。

世間や親の期待する家意識に支えられた、男の姓を名乗るということだけはしたくなく、夫の同意が得られないのなら、婚姻届は出さない覚悟でいた。夫は「姓は単なる符号にすぎないから改姓をしても自分の人格が損われることはない」と言って承諾してくれた。

井上ひさし著『日本亭主図鑑』の中で「名前を変えたぐらいいで他方に吸収されてしまう人格など初めからない方がよい」意のことを言っている。彼も妻の姓を取ったが、婚姻の際に妻の姓での届出が1多にすぎないという統計がある。根強く残る家意識の中で、嫁としての私でなく一個の女としての私であることを宣言しておけば、後々に嫁だと思っただけであるし、事実案であったと思う。

民法七五〇条に定められた「夫が妻いづれか一方の氏を夫婦の氏と決め……」という夫婦同姓の原則はまだまだ改正の余地があるにしても、妻の姓を取ると言おうものなら、夫や周囲の逆鱗に触れ結婚そのものも危くなるのが現状である。夫婦間の対等の意識の現れとして、夫の姓・妻の姓を名乗る割合が半々にまでなる時がくるのが先決だという気がする。地域、職場では、正式に結婚している世帯としてしかりつらないことを思えば、法的に結婚しているという私の敗北感、この

十年で希薄にはなったものの、相変わらずとまどいとして残っている。

法の精神や意義について真剣に勉強したことがないので、あまり大きなことは言えないが、どうも法は人間を信頼していいことが前提となっていてるように思えて仕方がない。婚姻制度に關係あるものとしてみて、当事者が話し合えばすむようなことを、逐一法で定めている。例えば、未成年者の婚姻に対する父母の同意、夫婦同姓の原則、待婚（再婚禁止）期間、離婚、財産管理、扶養、相続内縁等々。

現民法が旧民法（家制度を明文化）の否定のうえにできたものである以上、法の段階としてみるならば、それも当然であるかもしれない。弱者の保護も法の目指しているところであるから、法は、真に個人が自立して社会的な人間として生きるようになるまでの必要悪として存在するものようである。

『ひと夏の家族―八週間、子どもたちは変わった』

エレン・グレイグ著
主婦の友社・一四〇〇円

カウンセラー・セラピスト・作家として活動している作者が、自らの離婚によってひどく傷つき、逃げるように出て行った子どもたちと、もう一度ひとつの目的に向って力を合わせ、家族としての連帯感を確認しようとはじめたサマーキャンプでの体験談です。

両親の離婚等で、同じように傷つきどこのキャンプにも行けない子ども達を預り、

漠然としてではあるが、大局のところでは、婚姻届を出しても出さなくても、今の家族意識にからめとられた結婚の表と裏にしかかってないんだ、という気がする。だからこそ様々な形態の家族を容認できるような法律と、自らの意識を変えていかなければならないと思う。そして最終的には、法が消滅していくような社会をめざしたいものである。

別居生活続行中―父・子V

福岡市

結婚して六年目の冬ひとつ出来事が引金となり、それから、一年半の間ずっともんだの挙句夫本人の希望で東京へ転勤。単身赴任という形で彼の家を出て行った。お互いの関係を見つめ直してみようということだ。実のところ相手に押し切られたようなものだが、私自身もホトホト疲れて、しばらく

一緒にサマーキャンプで過ごす八週間の中の出来事、さまざまな子ども達の想い、子ども達の目を通して見た親達の姿、愛に飢える子ども達の姿が描かれています。キャンプ生活の中で子ども達はいろいろな問題を投げかけます。そして自分自身を見つめ、愛と思いやりを知り、一人一人旅立っていききました。

（貞方）

休憩タイムが欲しい時期でもあった。そしてもう一年が過ぎてしまった。東京と福岡じゃト遠すぎるが、お互いつかず離れずの関係で別居生活続行中！

子供二人連れて夫の所へ向う時は、「家族に行くようなもんだなあ。」ひとりで行く時は「夫婦やっています！」というのが実感だ。親子三人押しかけて行くと夫は、「現実には引戻される」と言う。ひとりになってどんな夢を追っているのだろう。自己中心的な男で子供達への愛情も乏しい人だが、彼ら（五才と四才）は父親が大好き。日常生活の中で父親の言動あれこれを感じ出しながら、兄妹で話している。

たわいない話だが、ある日テレビドラマの中で男がセールス先で断られシケた顔して帰ってくる場面を見て、息子は自分の父親とイメージをだぶらせたのかボンボンと言う。「父さんも大変だね！」

生意気な事を言うなあと思いつつも妙に感心させられたりする。娘は娘で、食事の時などに父親のキラキラな食べものが出てくると、「ピーマンすかんっちゃねえ！」

子ども達の頭の片隅にはいつも父親が住んでいる。その気持ちを大事にしてあげたいと思う。時々会う父との親子関係。今のところ別に不思議がることもなく、ウチはこういうもんだあぐらいに現状を受け止めている様だ。再び一緒に暮らせば即解決というものでもなく、これから私たち夫婦がどうなるかわからないが、いずれにしても子ども達には、折々に話していかうと思っている。

親業講座を受講してーA親・子V

福岡市

子どもを産めば誰れでも親になれる。けれど親であるということに、私は近頃難しさを感じてきた。まだ年齢的には小さな子どもだけれど、日常的に起こる親子げんかがそのうちに親子の断絶になっていくのではないかと不安に思ったりするのだ。

三歳の娘はまだ親の權威やちからでおさえることもできるが、五年生と口達者な二年生の娘たちとはささいなことでトラブルが起きる。「テレビ見すぎじゃない」「勉強しなさい」「部屋を片づけなさい」「手伝って」と言う私に「今しようと思ったのに」「するってば」「わかっている」「すりゃいいんでしょ」という返事をしながら五分、十分経っても動かしそうとしない。私はだんだん頭に血がのぼってきて「何度と同じこと言わせないでサッサとしなさい」と強い語調で命令し、子どもはフンという表情をかくさず部屋にひっこんでしまう。

親業講座というのとはこんな時に心理療法のカウンセラーの使う方法を、親子関係に取り入れて解決法を示してくれるのだ。抽象論でなくかなり具体的にである。講座ではその方法を身につける為に訓練する。参加者が互いに子どもや親になってみてロールプレイしてみる。自分が子どもの役を演じた時に、親から命令、きめつけ、説教、脅しを受けると反抗的な気分になってくるのがわかる。親の受け答えいかんで子どもは、嘘をついたり、敵意をあらわしたりするが、反対にやる気を

起こしたり相手をいたわるやさしさを見せてくれたりする時もある。

アメリカで始まった親業講座もこの数年間で広がった。親子関係をよくしたいと思う気持ちは国の違いを越えて同じなのだ。

親業は親子関係だけでなく、夫婦や、先生や生徒というように色々な人間関係にも効果的な方法だと思ふ。一度受講しただけで全てがバラ色に変わるようなマジックではないけれど、自分が見えてきて少しづつ親子関係も変わってきたように思ふ。

（『親業』トマス・ゴードン著、近藤千恵訳サイマル出版会）

（追論）子どもと親である自分との関係を客観的にとらえること。親業講座はその為のカウンセラーの役割を果たしているようだ。しかし、自分が子どもの頃感じたあの反響感とかふてくされた気持ちを思い出せば、子どもの心に多少なりともふれることができるのではないかと思ふ。



（色川）

二年ほど前、中野重治の自伝的小説『梨の花』を読んだ。年号が明治から大正に変わる頃の北陸の農村の暮らしが、一人の少年のわずかな感性を通して、実に生き生きと写しとられている。

当時息子が一歳半。ちょうど言葉覚えていく時期で、意識が外界にめざましいばかりに感応する。その様子は、見ていて少々こわいくらいの気がするものであった。新しい生が発見するに足る何ほどのものを私達の生活は持ち得ているのか、と。それだけに少年の中野の目、キラキラしたその輝きに魅了されたのだらう。

まず、淡々とした描写の、そのディテールの豊かさに目を見張る。この作家の類まれな記憶力のせいでもある。しかしなにより、子供をとりまく世界が具体的でたしかに手ざわりを失っていないからだろう。生活の中に生産があった。いや、生活は生産だった。良平（中野）達は学校の帰り路には必ず鍛冶屋を覗き込む。ふいごがうなり、赤い鉄の火花がはじける。

隣のおじさんは綿うちがうまい。「そのごみのようなのを、おんさんが竹の箸でちよいちよいと摘むようにして寄せる。すると埃のように見えていたのが立派な白い綿になる。そのひとつまみを、ふうわりとおんさんが綿の山に加える」それは、みている良平たちに手裏か魔術のように思えた。

あれができるんだらう、と。時折村を訪れる石臼の目切り屋や、桶の入れや、箕師や、屋根ふき屋や石垣積みの仕事も、いくら見ても見飽きることがない。少年は見つめる。息をつめて見つめる。それは、祭りの夜の綿菓子以上に不思議で幻惑的だ。大人の世界は未知の魅力に満ちていた。もちろん、子供は見物者であるだけでない。「あき」（稲刈）には稲運びをするりっぱな労働力だ。稲穂の粉が目に入って脂目になった朝は目があかない。その不快を彼はもう知っている。

良平は縄ないが得意だ。祖父が言うには、彼の縄は「いい縄」なのである。「にわ」（土

中野重治著『梨の花』

間）に縄を敷いて「しやりしやりつと腕いっぱいに伸ばしてやるのが良平には気持ちがいい」「ひとり縄なうをしていると、『にわ』じゅう、家じゅうしんとしているのが良平に気持ちがいい」。ここには労働によってもたらされた、リズムカルな心の風景のひろがりがある。これに続けて彼は言う。「子供から若い衆の方へひとあし近くなつたような、だれかに自慢してもいいような気になつてくる」

できる仕事を一つ一つ手にすることによって、少年はしっかりと足どりで大人に近づいていく。具体的でたしかに世界——そのたしかさは

「今」のたしかさにとどまらず、「昔」から続くものとしてのたしかさでもある。たしかな歴史感覚と言いかえてもいいだろう。

祖父母と暮らす良平は（父母と妹たちは朝鮮に、兄は福井の中学校に在る）、折にふれ祖母の思い出話を聞く。それは幕末の越前の国の倭約令の話や、「ごいつしん」（明治維新）の話や、「みのむし騒動」（因民党のようなもの）の話だったりする。そして、それらの「昔」は、「今」見えるものとしてある。

福井に続く往還道がある。祖母は娘の頃この道を通って福井に行き、倭約令にあわせて町の入口でかんざしを隠した。みのむし騒動のあおりで福井の牢へひっぱられた祖父が歩いた道でもある。そして今、週末に兄が三里の道のりを歩いて来る道であり、手前の幾分か良平の通学路でもある。

「そのおばあちゃん、むかしむかし、どれくらい昔だかはわからぬが、頭のかんざしを抜いて袂へかくしたその志比口を通つてあんちゃんはこのつちへ歩いてくるのだ」

白々とした道が、時間の重層をひっそりとたたんで続いている。生産が視界から消えてしまった現代の都市。生成のプロセスの見えない完成品が過剰にあふれる生活。労働とは無縁の子供達。戦後とくに高度成長期以降はたまたに切りさかれた町並。無数のブラックボックスが口をあけるこの抽象的な現在の世界は、小さな目に何を映すのだろう。

（筑摩書房刊『中野重治全集 第六巻』所収。新潮文庫にもある）

（福岡市）

「働きたい」気持

福岡市

三十五歳。
不動産会社勤務。
十時から十八時、休憩なし。
時給五百円。
宅地建物取引主任者資格有り。

福岡へ来て三年目、今、不動産屋で働いている。勤続四年の女性と実質二人だけの勤務。他に社長夫妻。総勢四名の極小企業。

賃貸専門、顧客の条件をもとに現地案内。どの程度を望んでいるかを掴むのが契約締結までの鍵だ。その他入居者からの苦情処理、図面ひき等々。

今五年生になる上の子が生まれたのは大学四年の時だった。卒業できるかどうかで一杯、就職活動をするなど頭の片隅にもなかった。それから十一年経たず、職安の職員と顔馴染になる程捜してもみつかるのはバートだけ。時間ぼろつきりだけの給料。これが働きたいと思いついてきた結果なのだろうか。

漠然と思っていた、働きたい。それは強迫観念にも近く、子どもを育てることもどこか上の空だった。いつもどこかに不安と不満があった。働き始めれば何かが変わる。手応えのあるものがつかめる。精神的自立。経済

的自立。言葉だけが駆けめぐる。

五年前、母と不動産屋を始める。二十年以上も建築業の実績を目のあたりにしてきた母の経験と私の資格をもとに。しかし、日常業務といえる程はつきりした仕事もなく、ただ母と共に不動産屋をまわり、情報を集め、時おりたずねてくる客の応対をするといった毎日、仕事らしい手応えをつかめず焦立っていた。

一年半すぎた頃、突然夫に転勤の話。少しの迷いはあったものの、結局は夫と共に福岡へ。働きたいという気持もこの程度のものかと、自嘲気味。

福岡へきて一カ月後からの山林専門の不動産屋。インテキヤ会社とわたり一カ月で退社。ステンレス鍋のテレコール。強引な商法に嫌気がさし二カ月後退社。地方銀行の庶務係。給与計算から機械操作まで全く経験のない私にとつて一番きつかった仕事。八カ月後、契約終了でデューン。電力会社のコンパニオン。ビデオの貸し出しの他に仕事なし。ただ座っているだけ。する仕事がないのはつらい。そして再び不動産屋。我慢がたりないというか、職業意識に欠けるというか、実に短期間によくもまあこれだけかわったものだ。

けれど、その中でただ一つ、残り続けていくものがある。働くことの方が自然と感じる気持。

働きたいという思いの底にあるものは何だろう。収入を得たい、能力を発揮したい、社

会参加……。働き始めた時の諸々の問題をかみあわせると、その割のあわなさに思わず立ち止まる。しかし働きたいと思うなら、思いを重ねるだけにはおわらせたくない。止まればまた歩き始めなければならない。

女にとつての仕事―「食う」ということ

福岡市

最近、履歴書を書くことがあった。その一枚の紙を読み返して、思わず溜息が出た。結婚してから七年、何をじたばたしてきたのだろう、しかも何とも無駄多いやり方で。その間就職二回。どうしてもやりたかった本づくりの仕事だった。一回めの時は、まだ子供もいなくて独身気分。心優しい男の子たちとワイワイガヤガヤ、スイミング・クラブを結成して週に一度はプールに行った。原稿取りに行つて著者と話し込み、外へ出ると街はとっぴりと暮れていたり、もちろん残業もいっぱいだった。仕事が楽しくて楽しくてしようがなかった。

二回めは、夫の転勤で福岡に来てすぐ、憧れの出版社に出したラブレターがきつかけて就職。むつかしくて忙しくて、苦しい恋だったけれど、前のは編集じゃなかった、と思えるほどたくさん学んだ。なにより、数々の面倒な作業が一冊の本というモノに結実する。それを開ける瞬間のこわさというこびのいりまじった気持は、ちよっと言いようのないものだった。

ところが二回ともほぼ一年間で辞めている。最初は切迫流産で入院。その前に一度流産していたから、とても仕事を続ける勇気はなく、迷う余裕もなかった。でも、超音波画像に六週目の命のたしかな搏動を見た時は、いとしさと感動で胸が詰まった。これに比すべき何物もない、と。

二回めは結局、自分の子育て欲求に勝てなかったということだろう。二歳半の息子を保育園に預けて、それは忙しい生活だった。八時半に家を出て帰るのは六時半。子供と過ごせるのは十四時間。子供は十時間くらい眠るから残り四時間。その間に二食食べさせてお風呂に入れる。どうしても「早くしなさい」が多くなる。朝まだ眠っている子を起こすのが一番辛かった。こんなにも小さいのに、この子の二歳は今しかないのに、と。次の子を考える余裕などない。「おかあさん、あかちゃん、うんでね。ひとりじゃさびしいけん」が決定打だった。

そして今、夫と別れて子供と自分の自活の道を探すはめになった。新聞と比べるとまず求人欄が目に行く。まさきに見るのが給与。公的扶助を計算にいれても、最低十二、三万は稼がなければ食べていけない。「十六万以上」などとあれば職種に関係なく心が動く。その時々を選択を後悔はしていない。会社で迷惑をかけた負い目はあるけれど、私は産みだかっただけ、育てたかった。一個の生が開いていくのを目で見ていたかった。肉体的と言つていいほど、私にとっては自然な欲求だった。

ただ、「食う」という視点が抜け落ちてい

たな、とつくづく思うのだ。食べるための仕事だつたらあんな辞め方をしただろうか。たぶん「自己実現」という表現が一番似つかわしい自分の仕事への向い方が、急にやわで根のないものに思えてくる。

学生時代から「女性の経済的自立論」は好きではなかった。働いてさえいれば自立しているつもりなの女の人など見るとげんなりした女の、いや人間の自立なんてそんな簡単なものじゃない、と反発していた。

人間にとつて最も基本的な「食う」ことを、同じく基本的ではあるが全然次元の違う「男女関係」を基盤にして考えるのは、やっぱりかなり変だぞー最近達したこの単純な認識があの「自立論」だとは思いたくないのだけれど……。

専業主婦対働く女

福岡市

女も社会参加を、とのかけ声が声高に叫ばれ、働く主婦が増えてきた今日、専業主婦も仕事をもち女たちを、ある程度理解し、応援してくれているものと思つていた。結婚、出産後も続けていた仕事を、夫の転勤のためにやむを得ず中断して、専業主婦となり、主に主婦たちの集まりなどに顔を出すようになった。主婦たちの多くが、働く女たちに、あまりよい感情をもっていないことに気がついた。

その反感は、日常かけられる迷惑への苦情となつたり、ほつたらかしの子供の、子供社会への悪影響に対する心配となつたり、世話のいきどおかぬ御主人への同情となつて現れたりする。かつて、仕事か家庭かの二者択一の末家庭を選び、選んだからには、家庭第

一、家族の幸福こそが自分の幸福と思ひ定めてきた彼女たちには、自分たちが力こぶを入れた守りとする家庭を、ないがしろにしているように見える女の存在が、許せないのだろう。女は、家庭が人並におさまった上であければ、社会人として何をなさうが、「あれじゃあねえ」ということになるようだ。

専業主婦は、自分の存在理由を、性別役割分担においている。男が経済活動を担う一方、家事、育児、地域の活動では、女が主導権を握る。そして、商品価値のある物の生産を優先とする考え方は、経済価値がないために軽んじられていた主婦労働を、経済尺度では計り得ない、生命を生み育てる創造の仕事として評価し、女性の性役割を男性のそれと同値とみることで、女性を男性のバートナーとして復権させ、男女平等を実質的に実現できるとする。



も聞く。

それに比べて、私が働いていたときは、仕事の上に、家事・育児に追いつけられ、実にゆとりのない生活だった。地域の人たちのつながりも希薄で、社会教育によって知識、教養を高めようとか、ボランティアで地域の人のために役に立とうとかいうことは、思いつきもしなかった。冷凍・インスタント食品にも合成洗剤での洗濯にも、何の疑問もなかった。家事は、一刻も早く切り上げて子供のための時間に振り当てるため、最少限に制限し、ただただ合理的であることが、最大の善となった。

現在、女が、男の中に交って、男と平等に遇されることを目指すとすると、多かれ少なかれ、似たような状況に陥ってしまうだろう。それは、今の社会では、目標とする男の労働が苛酷である上に、働く女は、同時に主婦でもあるという、二重の役割を担わなければならないからだ。働いていても、家事・育児は女の仕事という、役割分担の通念が、男にも女にもあるためだ。

とすると、家庭主婦の存在価値のよりどころとなつていく役割分担の意識が、働く女の状況を、より苛酷にしているといえないだろうか。さらに、主婦が、家事は女の仕事と思いつめることが、夫を、よりモレーン仕事人間にかりたてているのではないだろうか。互いの分担に精進するあまり、お客さんか、下宿人も同然となつてしまった夫と、接点もなく、互いの世界を住み分けて、それで幸せといえるのだろうか。

女の自立は、もちろん、経済力だけではな

い。男並に働くことだけが女性の地位向上の道と考え、専業主婦をおくられた女とみなしかならぬ、働く女の傲慢さは、反省されなければならぬ。大いに認められるべきだろう。しかし、分担役割に固執するあまり、他の生き方の選択を認めようとしなければ、それが通念として固定されるならば、家事・育事に参加したい男や、働きたい女にとっては、非常に不自由な世の中といわざるを得ない。

役割分担意識が固定化され、なおかつ、男の役割と女の役割に序列がある限り、一部の女が男の役割に移動したところで、男と女の位置関係は変わらず、むしろ、女同志の対立が深まっていくだろう。男も、女も、自由に自己実現の道を探ることのできる時代を迎えるための第一歩は、働く女と専業主婦が現状での互いの立場の相違をふまえて、女の明日に向けて連帯していくことではないだろうか。



子連れ九住登山願末記

福岡市

「え、九住へ行くの？子ども連れで？」かくいう私は新参者。「もちろんよ。大丈夫って」福岡あんふぁんての面々は、涼し気な顔でにこやかに、しかも平然とたたもうた。経験者がおっしゃること故、大丈夫なんだろう。かくして、車四台を連れねて六家族が一路地蔵原キャンプ場へ。一歳から六十五歳まで父親一人を含む総勢二十五人。木の香がうれしいバンガロー泊り。あれ／＼豚汁の献立予定がいつの間にかカレーライスに変身して（これが後々思わぬ威力を発揮するとは、誰ぞ知る）見よう見まねで小さい子も男の子もじゃがいもの皮むきやキーマンの小口切りをし、目をこすりこすり火を焚く。

芝生の上で明日登るであろう連山のシルエ

ットを望みながら輪になっての夕食。夫も参加したT夫婦に十六人の子どもの風呂を頼む。そして花火を楽しんだ子どもたちが寝静まると、これぞわが福岡あんふぁんての本領発揮の時間だ。ビールにワインに、ほろ酔い気分、靖国神社公式参拝から、次の遊びの計画まで硬軟とりまぜた話に花が咲く。さて午前様でも山登りのお弁当作りに手抜きはしない。（皆さんえらいですね……）

車で牧の戸の登山口まで。まだ数歩もゆかぬうちに四歳のわが子は歩けない。おんぶし、さては体調が本調子ではなかったかと来る前の発熱に思い当る。他のちびさん、ぐずり始める。ところが「おばちゃんがおんぶ

情報コーナー

☆「女から女へ送る熱きメッセージ」

講演・紀平悌子（日本婦人有権者同盟会長）

歌・吉岡しげ美（シンガーソングライター）

12月8日（日）一時より
狛江市福祉会館（小田急線狛江駅下車
バス第一小前／会館前）

入場料 前売り千円（当日千二百円）

託児有 2才／就学前まで
おやつ代二百円。申し込みは前日までに
主催 狛江市婦人問題を考える会

連絡先 昼
夜7時

・電話で予約をお願いします。

☆みかん狩りに行きましょう

12月1日（日）

場所 小田原駅から熱海海岸又は石名坂行バ
スで15分の米神（こめかみ）下車、徒
歩で30分。

集合 新宿駅、9時頃のロマンスカーに乗る
予定。急行利用の人や小田原方面の人
とは、小田原駅で待ち合わせ。

申込 11月22日までに。事務局まで。

☆「中絶ー北と南の女たち」上映会

講演、丸本百合子 東大病院産婦人科医

11月23日（日）一時半／4時

大田区生活センター（国電蒲田駅二分）

☆スライドショー 変わりゆく「女の仕事」男
の仕事」 アメリカ報告記

ブルドーザーの運転や、クレイン車の操作、
電気工事、水道工事、建設現場、消防士。

伝統的に「男の仕事」だった技能職域を、
アメリカの女たちは一歩一歩開拓しつつある。

彼女たちは男らしい女？私たちが、違うの
かな？……日本の女たちにひとつの方向を示
す報告記。見たい人は連絡を／出張します。

R&R（女のワークショップ）

☆講演会「男から見た出産と子育て」

「楽しく過ごす妊婦の会」では、怪傑ハッ
スバズバンド（晶文社）の著者、村瀬春樹さ
んを講師にむかえ、お話をうかがいます。

日時・11月26日（火）午後1時

場所・国電阿佐谷駅そば 木風舎（本屋）

料金・一五〇〇円

連絡先・ふくだ

☆お産サイドブック 置いてあります

全国の紀伊国屋書店

模範舎（新宿）03・352・3557

ブックインタナ（茨城県猿島郡）02807
6・6616

ブラザード書店（西荻窪）03・332・1
187

木風舎（阿佐ヶ谷）03・398・2666
ビビ（お茶の水）03・295・2580

事務局から

スタッフから(福岡グループ)

☆今月号に新しいグループリストを同封しました。まず入っているかみて下さい。特にグループ連絡先の方は自分達のグループがぬけていないか、住所・電話番号に誤りがないか確かめてください。誤植のあった場合はすぐ連絡をお願いします。

☆今月号に予定していたメンバーが急病のため急きょ福岡グループに編集をお願いしました。時間的に余裕がなくて大変だったと思います。文章が多いけれど、同じ会員の考えであること、是非目を通してください。毎号のことですが、感想批判なんでも反応がくると嬉しいものです。気軽に情報紙へのおたより待っています。

スケジュールメモ

11月27日(木)平日あんふあんて
11月30日(土)土曜あんふあんて
12月16日(月)12月号発送(神楽坂の幾代宅)
☆次号の編集は12月・1月号併号です。3月上旬までの情報は流山グループまで。送り先

☆来年2月号は永福町グループ(平日あんふあんて)の中からできと

「夫・男との関係」で詩・原稿募集中

「女の子で損したことある? 男の子で損したことある」と、子供達に聞いてみました。立ったままおしっこが出来ないもん(裕子・小三)。女は弱いけん、男に負ける(祥子・五歳)。部活なんかで着替える時、女子優先だったぜ。女子は部屋で着替えるのに、男子はその辺でやれ、となる。ひでえぜー(一志・中三)。別にないよ。そんなこと、あるわけない(光宣・中二)。男の子の言いなりになるのがいや。けんかで負けるのがくやしい、特にお兄ちゃんに(晃子・中一)。「わかんないよ。ママさんは?」ママはね、男の人と同じに働いても、女だからって、会社は男の人より少ないお金しかくれなかったから損しちゃったヨ「わかった。僕が大きくなったら働いて、そのお金、ママさんにあげるからね。それまで待ってよね」(貴幸・四歳)。けんかの時、素手ではたうちできないので損(美木子・小六)。将来、頼るより頼られる方が気分がよいのではないかと思うので得(成博・小五)。体育で、嫌なまわしをつけてすもうをとらされるのが損(晃博・小四)。ない! 男がよい、強いもん(良太・五歳)。タエもチンコが欲しいな(多恵・三歳)。損したことも、得したこともない(夏子・小六)。女の子の方がよかった、いじめられないもん(樹人・五歳)。女子と同じことしても先生にすぐおこられるし、たたかれて悲惨。野球とか、サッカーとかいろいろなスポーツができて得(央・小六)。

☆当会について詳細を知りたい場合、封書にて、郵便番号・住所・氏名・電話番号を明記し切手四百円分(なるべく少額切手で)を送って下さい。宛先は表紙上段に記載。
☆入会希望の場合は、なるべく六カ月(二千四百円)以上まとめて郵便局の振替口座で払い込みを。口座番号は表紙上段に記載。なおTEL番号の記載もお忘れなく。
☆事務局の電話受付は原則として月・金曜の二・四時ですので御協力を。
☆会費の払い込みを忘れている方は至急払い込みを/休会・退会も必ず連絡をください。